

続・サンクチュアリ教会を支持する人々の言説の誤り (3)

サンクチュアリ教会の中村仁史氏 (元・光言社の翻訳担当) は、二〇二〇年一月二十九日公開のサンクチュアリ教会の礼拝「天運と聖霊の宿る『8大教材教本』」『統一原理』から見た独生女論の問題点』で、真のお母様批判をしています。

今後、何回かに分けて、中村仁史氏による真のお母様批判に対し反論していきますが、今回は、お母様が語られる「天の父母様」の概念が真理であることを明らかにします。

なお、これらの内容を総合的に理解し把握するためには、「真の父母様」の掲載文や映像を「<https://trueparents.jp/>」の掲載文や映像を「trueparents.jp/?page_id=5661」をご覧ください。

注、真の父母様のみ言や『原理講論』からの引用等は「青い字」で、サンクチュアリ教会側の主張は「茶色の字」で区別しています。

一、「神は天の父母様である」ことを否定する中村仁史氏の言説の誤り

①神は「天の父母様である」神はご自身の中に陽性・陰性を持っておられる

中村仁史氏が説教で真のお母様批判を行い、疑義を呈している内容に対し、すでに教理研究院は「真理とは、『実体み言』

である天地人真の父母様―天―国時代におけるみ言の理解と解釈について」(2019年12月25日「真の父母様宣布文サイト」に掲載)で、その回答となる内容を公開しています。<https://trueparents.jp/?page_id=5661> その内容を踏まえないまま、中村仁史氏が真のお母様批判に走っていることは、み言の本質が理解できていないと言わざる

をえず、非常に残念なことです。中村仁史氏は、次のように真のお母様批判をしています。

「最初に私が違和感というか、おかしいと思ったのがこの日ですね。二〇一三年二月十日陰暦一月一日、真の神の日のこの日です。……この日に初めて家庭盟誓が、神様が天の父母様になって、名節の名称が真の神の日から天の父母様の日というふうに変ったんですね。変わったことに驚きました……」

しかし、真のお父様は、神が「天の父母」であることを明確にしておられ、『原理講論』も神が「天の父母」であることをお父様は神様に、「天の父母様」という呼び名で語りかけて祈っておられます。

神について『原理講論』は、次のように論じています。「存在するものはいかなるものでも、陽性と陰性の二性性相

真の父母様宣布文サイトはこちらから↓



の相対的關係によって存在するという事実が明らかにされた。それゆえに、森羅万象の第一原因としていまし給う神も、また、陽性と陰性の二性性相の相対的關係によって存在せざるを得ないということは、当然の結論だといわなければならぬ。……我々はここにおいて、神における陽性と陰性とを、各々男性と女性と称するのである」(46、47ページ)

神は唯一ですが、陽性・陰性(男性・女性)の相対的關係を持って存在しておられます。ゆえに『原理講論』は、神に対し「父母なる神」(61ページ)、「人間の父母としていまし給う神」(92ページ)、「天の父母なる神」(235ページ)、「神は、霊的な父母として、人間を実体の子女として創造された」(429ページ)、「神は子女を失った父母の心情をもって悲しまれながら悪逆無道の彼らを救おうとし

て、罪惡世界をさまよわれた」(591ページ)等々と述べています。これらを見れば、神は、キリスト教で呼んできた「天のお父様」と呼ぶのが、よりふさわしいと言えるのです。

真のお父様は『平和神經』に収録された「靈界報告書」の表題に「神様は人類の父母」と明記しておられ、「天基元年」を宣布された二〇一〇年の「真の神の日」の祈禱で、神に対し「天の父母様(하늘부모님)」と呼びかけて祈っておられます。さらに、真のお父様は神の概念について次のように語っておられます。

「皆さんの生命の根は、どこにありますか。墮落していない父母にあります。では墮落していない善なる父母の位置は、どのような位置ですか。神様が二性性相の主体であられるように、神様が自分の二性性相を展開し……人間を造ったのです。アダ

ムは神様の男性的性稟を展開させたものであり、エバは神様の女性的性稟を展開させたものなのです。このように見るとき、私たち一般人が普通『天のお父様!』と言うのは、お一人ですからそのように言うのでしょうか、そのお一人という概念の中に『天のお父様、お母様』という概念が入っているというのです」(八大教材教本『天聖經』1421ページ)

真のお父様は「天のお父様」の概念の中に「天のお父様、お母様」すなわち「天の父母」という概念が入っていると述べておられます。神はご自身の中に陽性・陰性の二性性相を持っておられ、その神に似せて「神様の男性的性稟」であるアダムと

「神様の女性的性稟」であるエバを創造されたのです。それゆえ、お父様は「結婚とは何ですか。男性を通じて愛を結ぶことにより、半品存在である女性が

完品存在になることです。男性も同じです。結婚を通じて完成するのです」(同1671ページ)と語っておられます。『原理講論』も次のように論じています。

「人間始祖として創造されたアダムがもし完成したならば、彼は被造物のすべての存在が備えている主体的なものを総合した実体相となり、エバが完成したならば、彼女は被造物すべての存在が備えている対象的なものを総合した実体相となる……彼らが夫婦となって一体となったならば、それがまさしく、主体と対象とに構成されている被造世界の全体を主管する中心体となるべきであった」(60、61ページ)

神の似姿として創造されたアダムとエバは、おのおの、被造世界全体の半分の実体相にしかならないのです。ゆえにアダムとエバは、結婚して夫婦

になってこそ、初めて被造世界全体を主管しうる「中心体」となるのです。すなわち二人でこそ、完品存在になるのです。真のお父様は、「神様は天の父母である」ということについて、次のように語っておられます。

「私たちは二つの世界を知っています。霊的な世界も持っているというのです。霊的な天の国に神様がおられることを知らなければなりません。分かりますか? 祈禱すればいいのです。祈禱。神様がいるではないですか。真の父母は地上の父母であり、神様は天の父母であるのです」(マルスム選集1701239)

真のお父様は「神様は天の父母である」と語っておられます。また、次のようにも語っておられます。「創造主は真の愛の縦的父母であり、創造されたアダムとエ

バは……神様の体である**横的**な父母の立場に立ちます。それらが……内外の共鳴体となって授受作用をすれば、中心が生じると同時に、その内外の共鳴圏の中心が植えつけられるのです。それが、皆さんの生まれた生命の根源です」(八大教材教本『天聖経』1455ページ)

神は「縦的父母」であり、アダムとエバは「横的な父母」です。真のお父様が「天の父母」「縦的父母」と語っておられるように、神は人類の「天の父母様」です。

さらに、真のお父様は天の父母様について次のように語っておられます。

「神様が父ならば**母なる神**がいなければなりません。分かりますか？ (はい) **天の父母**と言うときは必ずおふたりなので、統一教会では、二性性相の中和の主体であると同時に、格としては男性格としておられると言

います。ですので、正から分かれて、男性と女性を分けておいたのです」(マルスム選集388-1155)

真のお父様が「神様が父ならば**母なる神**がいなければなりません」と語っておられるように、神は父なる神だけでなく、母なる神もいなければなりません。それゆえ、神は天の父母様であるというのが、より原理的な説明です。

サンクチュアリ教会では、この「天の父母」という概念は「二元論」であると批判していますが、その批判は完全な誤りです。神は唯一であられ、一元論であることは言うまでもありません。しかし、『原理講論』に「第一原因としていまし給う神も、また、陽性と陰性の二性性相の相対的關係によって存在せざるを得ない……**神における陽性と陰性とを、各々男性と女性と称する**」(46-47ページ)

ジ)とあるように、唯一なる神の中に男性と女性があるので、それに基づいて、真のお父様は「天の父母様」と呼びかけておられるのです。もし、天の父母という概念が「二元論」であるというならば、お父様ご自身が「二元論」を語っておられるという、とんでもない主張となってしまうことを知らなければなりません。

前述したように、二〇一〇年の「真の神の日」に、真のお父様は「天の父母様(奇言早旦旦)」と祈られました。その祈りには「**天のお父様、お母様**すなわち「**天の父母**」という概念が明確に入っていることを知らなければなりません。

②神の願いは、**実体の真の父母**になること

『原理講論』は、父母なる神として安息することについて、「**アダムとエバが完成された**

夫婦として一体となったその位置が、正に愛の主体であられる神と、美の対象である人間とが一体化して、創造目的を完成した善の中心となる位置なのである。ここにおいて、初めて**父母なる神は、子女として完成された人間に臨在されて、永遠に安息されるようになる**」(61ページ)

アダムとエバが個性完成し、結婚して「完成された夫婦」となることによって「初めて父母なる神は、子女として完成された人間に臨在されて、永遠に安息されるようになる」というのです。ところが、アダムとエバが墮落し、創造理想を完成した人間になれませんでした。真のお父様は、神が真の父母になれなかったとして、次のように語っておられます。

「神様は、先生の中でも最も優れた先生であり、父母の中でも**第1の父母**です。第1の父母なら、その父母は偽物の父母で

すか、真の父母ですか。**真の父母**だと言うのです。そのような真の父母が、**人間が墮落することによって真の父母になれませんでした**」(八大教材教本『天聖経』262ページ)

本来なら、神は「**父母なる神**」として、完成した人間に臨在して安息すべきであったのに、人間始祖アダムとエバの墮落によって、それができなかったというのです。

真のお父様は、神の願いについて、次のように語っておられます。

「神様の願いは何ですか？ 神様はこの全ての万物においては**主人であり、人類においては父母になる**ことです。神様はこの全ての被造物の主人であると同時に、**人間の父母**だということです」(マルスム選集195-189)

神様の願いは「**人間の父母**」

になることでした。真のお母様も二〇一三年の第四十六回「**天の父母様の日**」に、次のように語っておられます。

「お父様は、『**神の日**』をお定めになりながら、既に神様の解放のために**基元節**をお考えになり、**神様を「天の父母様」とおっしゃっていました**。今、お父様の祈禱の中でそのことを聞いたでしょう。(はい)そうですね。神様の願いは**父母様になること**なのです」(『トゥデイズ・ワールドジャパン』二〇一三年天暦二月号32ページ)

神の願いは、「完成された夫婦」に臨在し、永遠に安息すること成し遂げられます。二〇一三年天暦一月十三日の「**基元節**」は「**天地人真の父母様聖婚式**」が挙行された日です。真のお母様が「**「基元節」は、神様の夢が成し遂げられる日**」(天一国経典『天聖経』1374ページ)と語っておられるよう

に、その日、神の願いが成されたのです。それゆえ二〇一三年の「**基元節**」を迎える前、同年陽暦一月七日、お母様は指導者たちを集められ、次のように重大な宣布をされました。

「旧約時代には、神様を『**ヤハウエ**』と呼びました。新約時代には、『**父なる神**』と呼びました。『**基元節**』は、神様の夢が成し遂げられる日です。それで、今から名称を変えようと思えます。祈る時は、『**神様**』を「**天の父母様**」に変えなければなりません。……**神様は、天の父母様**です。祈る時、一番初めに出てくる単語が『**天の父母様**』、その次に『**愛する天地人真の父母様**』、このようにならなければなりません」(同)

真のお母様は二〇一三年の「**基元節**」を通して天一国時代を迎える前、「**神様**」の名称を「**天の父母様**」に変えると宣布されました。それは「**天の父母**

を中心とした地球星大家族主義の世界が成される時」(八大教材教本『天聖経』2048ページ)であるからです。そして二〇一三年の「**基元節**」によって、神の切実なる願いであった、**人類の父母**になる夢がついに成し遂げられたのです。

③天一国時代は、**天の父母様を中心とする理想世界実現の時**

真のお父様は、遠からずして「**天の父母様**」について明らかにするときに来ることを予告されました。

「皆さんは父母の能力を知らなければなりません。兄弟たちを知る前に父母を知らなければなりません。……この世の人々は**天の父母に對すること(内容)を、よく知らずにいます**。遠からず、これに對すること(内容)を明らかにすべきときが来るでしょう」(マルスム選集16-198-199)

このみ言は一九六六年三月二十二日、第七回「父母の日」の記念式で語られたものです。真のお父様はその式典で「この世の人々は天の父母に對すること(内容)を、よく知らずにいます」と訴えられ、「遠からず、これに對すること(内容)を明らかにすべきときが来る」と予告しておられました。

真のお父様は、ご自身が最後に創設された「アベル女性UN」(二〇一二年七月十六日)の創設メッセージで、次のように語っておられます。これは、真のお父様が語られたみ言です。

「今に至るまで、数多くの宗教がありますが、父なる神様を信じる宗教にはなりませんが、母のいない宗教を信じてきたという恥ずべき、恥ずかしさをこの時間に爆発させ、その歴史的な、あつてはならないその悲運の痕跡を取り消すために……私の歩む道は、平和な道ではあり

ませんでした。……父なる神様は知っています、母のいない父を自分の神様だと言って争い、奪い合う闘いをするこの教団だ、誰が是正してあげるのですか」(教理研究院著『虚偽に満ちた金鍾奭著「統一教会の分裂」―軌を一にする郭錠煥著「事必帰正」』光言社刊、346ページ)

このように、真のお父様は「父なる神様は知っていますが、母のいない父を自分の神様だと言って争い、奪い合う闘いをするこの教団どもの愚かさ」と激白されました。

真のお父様は、私たちが最後にすべきことについて次のように語っておられます。

「私たちが最後にすることが何かといえは、神様を知らない民族に、神様を分かるように、天の父母を教えるべきです。私たちが教えるべきではありません。天の父母に仕え

ることのできる三千万の民族になれば、絶対滅びません」(マルスム選集64―240)

真のお父様は「私たちが最後にすることが……天の父母を教えるべきこと」であると語られました。「天の父母に仕える」民族になれば、絶対に滅びないと言われているのです。これは、私たちが最後にすべき責任です。

「天の父母様」の呼称になったことで、今や「天の父母を教えるべき時代」と言えます。真のお母様も「地の果てまで、天の父母様を知らない人がいないようにすることです。それが私たちの責任」(天一国経典『天聖経』1374―1375ページ)であると、お父様と同じことを語っておられます。

真のお父様は、天の父母様を中心とした理想世界実現について次のように語っておられます。「新たに迎えた千年紀は、6000年間の救援摂理が完結さ

れ、創造理想を中心とした本然の天の国が建設される時です。……「一なる神様のもとの一の国(One nation under God)」を越え「一なる神様のもとの一の天宙(One cosmos under God)」として、天の父母を中心とした地球星大家族主義の世界が成される時です」(八大教材教本『天聖経』2048ページ)

真のお父様は、「新たに迎えた千年紀」とは「天の父母を中心とした地球星大家族主義の世界」であると語られました。真の父母様は二〇一〇年に「最終一体」を宣言。その後「天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会」を開催され、「天は既に、二〇一三年一月十三日を『起源(基元)節』として宣布しました。実体的天一国の始発であり、起源となる日が正にその日なのです」(韓日対訳『天地人真の父母定着実体み言宣布天宙大会』

41ページ)と宣布しておられました。二〇一三年天暦一月十三日の「基元節」は、天の父母様を中心とした理想世界である実体的天一国の始発であり、起源となる日です。

上述したように、二〇一三年陽暦一月七日、真のお母様は「神様」を「天の父母様」と呼ぶよう宣布されました。そして、二〇一三年の第四十六回「真の神の日」から「天の父母様の日」へと変更され、「天の父母様の日」の名で記念式典が執り行われました。また、式典の中で「家庭盟誓」を唱えるときも、従来の「神様」という呼称ではなく「天の父母様」に、第八節の「成約時代を迎えて」は「天

一国時代を迎えて」に変えて唱えられました。

ところが、中村仁史氏は「神様」を「天の父母様」という呼び名に変更したことに対し、「違和感というか、おかしいと思っ

た」というのです。

しかし、真のお父様は「家庭盟誓」を唱えることについて次のように語っておられます。

「家庭盟誓が出てきたことと事実が、どれほどありがたいことかというのです。誰の前に誓うのですか? 創造主・神様、天の父母の前に誓うのです。また、嘆息の立場で怨恨を持った地上の父母を解放成就し、縦的な神様と横的な真の父母様の前に誓うのです」(マルスム選集308―22)

一九九八年十一月二十一日、真のお父様は「家庭盟誓」について解説された中で、「家庭盟誓」は「創造主・神様、天の父母の前に誓う」と語られました。

天一国時代とは「天の父母を中心とした地球星大家族主義の世界」です。すなわち天の父母様と真の父母様に侍る時代です。二〇一三年の基元節を通して、天一国時代を迎えるようになるので、真のお母様は「家庭盟誓」

で「神様」が「天の父母様」であることを明確に分かるようにされ、「創造主・神様、天の父母の前に誓う」ようにしてくださいました。

(2) 真のお父様の願いは、真のお母様を中心に子女たちが一つになること

中村仁史氏は二〇一三年の「天の父母様の日」の祈禱について次のように述べています。「(二〇一三年の) 神の日に、当時、世界会長だった二代王様(注、文亨進様のこと)と韓鶴子オモニが代表祈禱をされたのです、二人が同じ日に。(祈禱文を対照し)その祈禱文です。この原稿が私の所にきて、両方を翻訳しました。翻訳した時に、気づいたというか、あれって思ったのが……二代王様は全部、天のお父様、(真のお母様は)天の父母様なのです。全部、最初から最後まで……『お二人の考えが違うのかな』とこ

ろ、創造理想を中心とした本然の天の国が建設される時です。……「一なる神様のもとの一の国(One nation under God)」を越え「一なる神様のもとの一の天宙(One cosmos under God)」として、天の父母を中心とした地球星大家族主義の世界が成される時です」(八大教材教本『天聖経』2048ページ)

で思ったのです。……後世ではここが、みんな全員が、公に分裂していった最初の始発点だと認識すると思います」

中村仁史氏は、二〇一三年の「天の父母様の日」に真のお母様と亨進様がお祈りをされた内容を翻訳したと述べています。そこで気づいたのは、お母様は神様を「天の父母様」と祈られ、亨進様は「天のお父様」と祈られたということ。彼は「お二人の考えが違うのかな」とここで思った」と述べます。

しかし、前述したように、真のお父様は「天のお父様」の概念に「天のお父様、お母様」という概念が入っている、すなわち「天の父母」の概念があると語っておられました。二〇一〇年の「真の神の日」で、お父様は「天の父母様」と祈っておられ、二〇一三年の「天の父母様の日」に、真のお母様も「天の父母様」と祈っておられ

ます。お父様とお母様の神様に
対する認識は、完全に一致して
おられます。

ところが、亨進様は「天の父
母様」と祈ることに対し次のよ
うに述べています。

「あらゆる人が私に、お願い
だから天の父母様の名前で祈っ
てくれと言っていたことを覚えて
います。……お父様の聖和の
儀式の後、すべてのことが終
わって、それから私は壇上に上
がり、もちろん『敬愛する最愛
の天のお父様』と祈ったのです」
(サンクチュアリNEWS 20
17年7月16日)

亨進様は、あらゆる人から、
「お願いだから天の父母様の名
前で祈ってくれ」と言われたに
もかわらず、それを拒否し
「敬愛する最愛の天のお父様」
と祈ったといえます。これは、
真のお父様が祈られる「天のお
父様」には「天の父母」という
概念があることを理解していな

かったからであり、無知ゆえの
行為であると言わざるをえませ
ん。それで二〇一三年の「天の
父母様の日」において、亨進様
は「天のお父様」と終始一貫し
て祈っていたのです。亨進様の
神様に対する認識が、真のお母
様だけでなく、お父様とも不
致であったことが分かります。

真のお父様はご自身が聖和さ
れた後について、次のように
語っておられます。

「今、先生を中心としてお母
様を立てました。先生が靈界に
行ったならば、お母様を絶対中
心として、絶対的に一つになら
なければなりません」(『祝福』
一九九五年夏季号68ページ)

真のお父様は、ご自身の聖和
後、亨進様が「お母様を絶対中
心として、絶対的に一つ」に
なって歩むことを願っておられ
ました。さらに、お父様は「先
生が一人でも真の父母様の
代身であり、お母様が一人でも

でも真の父母様の代身です」(マ
ルスム選集2011-126)と
語られ、「先生が靈界に行くよ
うになればお母様が責任を持つ」
(同318-260)と明確に
しておられました。ところが亨
進様はその願いに反して、真の
お母様と一つとなって歩むこと
ができず、「サンクチュアリ教
会」を立ち上げ、非原理的活動
をするようになったのです。

真のお父様は、天の父母様に
反対することに対して次のよう
に語っておられます。

「イスラエル民族を中心とし
て、その時まで四千年の間、準
備した全てのことにはサタン側に
渡っていきました。サタン側の
カインになってしまったという
のです。アベルに反対する立場
に立つので、天の父母に反対す
る立場に立つので、サタン側の
カインになってしまったという
のです」(同74-80)

天が準備したイスラエル民族

は、天の息子であるイエス様に
反対することによって「サタン
側のカイン」になってしまいま
した。同じように、亨進様は天
の娘である真のお母様に反対す
る立場、すなわち「天の父母に
反対する立場に立つ」ことで
「サタン側のカイン」の立場に
なってしまったのです。

サンクチュアリ教会に追隨す
る中村仁史氏は、光言社で長年
にわたって真のお父様のみ言を
翻訳する業務に携わってきたと
いいます。しかしながら、彼は
お父様の多くのみ言に触れなが
らも、み言の翻訳作業をしただ
けであって、お父様が語られた
み言の意味、本質までは理解で
きていなかったと言わざるをえ
ません。

彼の主張は、「神は天の父母
様である」ことを否定し、「天
のお母様」を無視する、すなわ
ち真のお父様のみ言を無視、否
定する、誤った言説にほかなり
ません。